

Title	ふたつの国内旅行について：デイドロとメネトラの紀行文
Sub Title	Deux voyages en France : Diderot et Ménétra
Author	鷺見, 洋一 (Sumi, Yoichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.110(247)- 123(234)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ふたつの国内旅行

——デイドロとメネトラの紀行文——

鷺 見 洋 一

I：碑名の解読

デイドロは『ブルボンヌ紀行』のなかで、郷里ラングルに近い温泉地ブルボンヌにある古城に見つけたラテン語碑文の解読を試みている。碑文を刻んだ石が温泉の蒸気にさらされていちじるしく風化しているため、テキストは左右両端に文字の欠落がいくつかある。デイドロが読みとったラテン文字は以下の通りである。

ORVONI. T
MONÆ. C. IA
TINIVS. RO
MANVS. IN
G. PRO. SALV
E. COCILLÆ
FIL. EX. VOTO¹⁾

娘 Cocilla の病気治癒を念じるこの希願文は、デイドロの解釈によると「ガリア在住のローマ人, Caius Jatinius」によるもので、温泉神 Orvon(低ブルトン語およびケルト語で「沸騰」を意味する)と Tomona(「熱い泉」を意味する)に捧げられている。

ところで、アンドレ・ガルニエは、その後発見された同種の碑文をいくつも参照し、欠落文字を含めて希願文のテキストを次のように復源した。

[B]ORVONI. [E]T. [DA]MONAE. C(AIVS). LATINIVS.
ROMANVS. [L]ING(ONVS). PRO. SALV[T]E. COCILLAE. FIL
(IAE). EX. VOTO²⁾

碑文が捧げられている神は Borvo と Damona であり、希願者の名前は Caius Latinus Romanus と当時の習慣通り 3 連式に読まれる。Romanus は名前であって「ローマ市民」という意味ではない。ING は従来 In Gallia (ガリアにて) の略と考えられてきたが、ガリアの人間が自分をガリアにいと記すはずもなく、他の碑文からの類推で Lingonus(ラングルの市民) と特定される。

手がかりとなる比較資料なしでラテン碑文に挑んだディドロは、結局解読に失敗したわけだが、アンドレ・ガルニエはディドロがその解釈において示した知見は当代一流のものであるとのべている。碑文解読のエピソードは『ブルボンヌ紀行』のなかで、たしかに著者の並々ならぬ教養を披瀝する見せ場を構成しているといえよう。だが、ラテン希願文の読解は1770年夏のディドロにとって、古典学や言語学のたんなる知識誇示にとどまるものではなかった。その「誤読」も含めて彼の解釈作業には、短いラテン文に自分のブルボンヌ滞在をなんらかの形で意味づける象徴性をもたせ、ひいては『ブルボンヌ紀行』という作品全体を解く鍵言葉の役割をあたえているように思われる。「象徴」ないし「鍵」となりうるテーマは以下の三つである。

- 1: 「沸騰」「熱」といった自然エネルギーへのこだわり。
- 2: 「娘」のための希願を介した「父性」の問題。
- 3: 古代ローマという記憶の復源。

本稿で私がディドロの紀行文と比較したいと考えているテキストは、パリのガラス職人メネトラの『わが生涯の記録』である。この長大な自伝作品の前半部分は、若いメネトラが親方見習いとしてフランス各地を遍歴し

て歩いた七年間におよぶ修業の旅の記述にあてられている。そしてここでもまた、私たちはディドロの場合とよく似た碑文解読のエピソードにぶつかるのである。

Nous arrivons à un vieux château au bas d'une colline comme l'on les dépeint dans les romans Au-dessus de la porte était une inscription ainsi conçue 《Crains Dieu et le bras du brave Crillon》³⁾

南仏アヴィニョン近郊のカリヨン城に仕事に赴いた時の思い出である。句読点の一切ないこのフランス語を綴っているのは一介のガラス職人であることを思いおこそう。城まで足を運んだ職人たちのうちで、読み書きができたのはおそらくメネトラ一人だったに違いない。古城を「小説で描かれるような」と形容する彼は、すくなくともルソーの『新エロイズ』ぐらいは読んでいたらしい⁴⁾、なによりも城門に掲げられたフランス語の碑文を読み、その意味するところを仲間にとくとくと解説している若いインテリ職人の姿が目浮かぶ。

哲学者ディドロにとってラテン語がそうであったように、ガラス職人メネトラのフランス語碑文解読は、数々の冒険や逸話に彩られた『わが生涯の記録』のなかでもひととき目立つエピソードであり、自叙伝の書き手の知的優越を読み手に強く印象づける重要な役割を果たしている。メネトラが解読した碑名はカリヨン城主のアピールである以上に、メネトラが執筆している自伝を飾るべき標語なのである。ここにおいても、書き手による碑文のテキストへの同一化は明らかである。メネトラは軍人貴族のカリヨン城主に平民のおのれを重ねあわせることで、碑文解読のエピソードに『わが生涯の記録』全体を貫くモチーフを凝縮させようとしているからである。そのモチーフは、ディドロにおけるのと同様、以下のように要約できるだろう。

1：おのれの強さ (le bras), エネルギーの誇示。『わが生涯の記録』の他の箇所ではもっぱら性的エネルギーの発散を示すきわどい逸話の形をと

る。

2：強い神（＝父）との関係。

3：古城（＝過去）という記憶の復源。

同時代の知識人と職人とが旅行をし、旅先で目にした碑文を解釈するという行為の中に、期せずして「エネルギー」、「父」、「過去」というテーマが出揃っている。二人の旅人（というよりもむしろ、二人の紀行文作者）にとってこの三つのテーマがどういう意味をもっていたかを解明するのが、この小論の目的である。

II：ディドロの場合

『ブルボンヌ紀行』執筆前後の状況をディドロの私生活、とりわけ家族関係や人間関係から説明するのはさほどむづかしいことではない。1770年8月2日にディドロがパリを発って郷里ラングルに向かったのは、面向きには一人娘アンジェリックの嫁ぎ先となるカロワイヨン家への挨拶、および絶交状態にある弟ディディエとの和解という二つの動機で説明される。この二つの動機はラテン碑文の二番目のテーマ、すなわち「娘の安全を願う父親」のテーマと響きあうが、当時ディドロはこの主題を拡大し、自分を「父」（対アンジェリック）および「兄」（対ディディエ、および妹のドニーズ）と位置づけるばかりか、亡き両親、とりわけ父に対する「子」としての意識を強め、「家族」という大きなテーマ系の中心に身を置いていたはずである。

たしかに『ブルボンヌ紀行』には、久しぶりの里帰りで一挙にあふれだしたかのように、ディドロの身内にたいする熱い心情が語られ、なかでもブルボンヌに二度も湯治にきた父親の思い出が切々と綴られている。このくだりはいかにも本論を中断しての脱線であるかのように記されはするが、逆にそうであるからこそむしろ書き手の真情が吐露されていると読まれることをディドロはむしろ狙っていると思われる。だが、ただそれだけのことであれば、『ブルボンヌ紀行』一篇は五十代の半ばをこえた哲学者のたんなる感傷旅行の記録にすぎない。ディドロがラングルの帰郷ついでに

ブルボンヌに逗留し、パリに帰ってから紀行文をしたための背景には、もっと別な理由が隠されている。

『ブルボンヌ紀行』冒頭で、著者は「なぜブルボンヌについて書くのか」、「なぜブルボンヌに滞在したのか」という二つの予想される問いにあらかじめ答を用意している。それによると、紀行文を執筆するのはいずれ湯治を必要とする病人の役に立つ資料を提供するためであり、湯泉にきたのはモー夫人とプリュヌヴォー夫人への友情からなのである。

執筆動機はともかく、ブルボンヌ来訪の動機が二人の女性に対する「友情」という説明は納得できない。プリュヌヴォー夫人が産後の不調から母のモー夫人に伴われて温泉場に赴き、友人のディドロが二人を見舞ったのはたしかに事実である。だが同時に私たちは諸種の資料から、ディドロは前年の1769年からモー夫人に急接近し、長年の愛人ソフィ・ヴォランをさしおいて夫人に熱をあげていたことを知っている⁵⁾。『ブルボンヌ紀行』で隠蔽されているのは、ディドロがラングル滞在の日程をブルボンヌにおけるモー夫人との逢引の都合にあわせて調整したふしが見られることに加えて、なによりもブルボンヌ滞在のあと、別の男と睦みくしているモー夫人を見てひどく傷つき、女性の心変わりという永遠のテーマにおそらくは生まれてはじめて心を悩ませながら、この紀行文を執筆しているという事情である。

かかる下世話な話をあえて持ち出すのは、ディドロの場合、実生活での失恋といったネガティブな体験がそのまま作品のテーマや雰囲気と直接反映するでもなく、さりとて作品が生みの親を離れて現実とは隔絶した美を獲得するでもない、いわば両者の中間的狀態に成立していることを強調しておきたいからなのである。私見では、『ブルボンヌ紀行』は核の部分にモー夫人との不幸な性愛の体験によって生じた空白を秘め、全篇がいわばその空白を埋めようとするかのように、ディドロによるアイデンティティー回復の仕掛けをほどこした作品である。旅を記述するという虚構作業を通じて、ディドロはモー夫人という存在の欠落を補填しようとしているのだ。

それまでほとんどパリを離れたことのないディドロにとって、1770年の

帰郷はまったく新しい外界との接触を意味していた。その新しい外界とは、ソフィーならぬモー夫人であり、パリの社交仲間ならぬブルボンヌの湯治客であり、妻や娘ならぬ妹や弟、さらには亡き父の面影であり、書齋の書物ならぬ温泉の湯煙りであり、パリの街並みならぬ古代ローマやガリアの遺跡であった。その限りで、『ブルボンヌ紀行』はディドロが〈パリ〉という一つの巨大な文化装置から束の間逃避することで、おのれの哲学者としての存在を解体し、改めて構築しなおそうとした試みとして読むこともできるだろう。冒頭で彼は友人のルーやドルバックが今回の旅についてうるさく問い質すであろうと、パリの哲学者仲間への揶揄気味の一瞥から筆を起しているが、紀行文末尾はブルボンヌの湯治社交場で自分が友情からとはいえ危うく哲学者としての信用を失墜させかねない勇み足をやらかしてしまった経緯が語られて、しめくりとなっている。モー夫人への怨念を秘めた紀行文は、フィロゾフたるおのれの自己確認にサンドイッチされた形で綴られているのだ。ディドロがアイデンティティー回復の最終段階と考えているのは、やはり哲学者の道徳なのである。

ラテン語碑文からディドロが抽出しえたであろう三つのテーマ、すなわち「エネルギー」「父」「過去」は、この哲学者の道徳という最終テーマに包摂される形で、一見とりとめなく書き散らしたような『ブルボンヌ紀行』全体のなかに分散している。以下にこの鍵テーマにそくして『ブルボンヌ紀行』のテキストを整理しなおしてみよう。

a：記憶によるアイデンティティー探究

テーマ1：〈父〉——テキスト冒頭の〈脱線〉部分。追憶に溺れてみせる演出のなかで、亡き父と自分を比較し、妹や弟への愛情を語り、最後に自分の〈優しさ〉を涙とともに確認する。この〈優しさ〉はアンジェリックの父たるディドロの自己確認でもある。

テーマ：2 〈古代のローマおよびガリアという過去〉——テキスト末尾近くにある碑文解読の試み、さらにブルボンヌ周辺の考古資料をめぐる記述、地質学的考察を通じて、自分を悠遠の昔と結びつけ、

歴史的存在としての位置を確認する。むろん、ここにおいては、自分を古代の哲学者になぞらえようとするフィゾロフ一流の想像力が働いている。

→以上の二テーマで〈家族〉および〈歴史〉という二つの関係におけるディドロの紐帯が回復される。

b：自然エネルギーによる宇宙論の探究——aのテーマ系が自己を一点に定位する働きをもつのに対し、この自然エネルギー論は、自己を含む世界のすべてを流動、解体、変化の相でとらえ、究極の〈全体〉のなかに相対比しようとする。温泉水の医療効果や成分に関する記述が、いつしか〈人工温泉〉の夢想到転化、さらに中間部で想像力はブルボンヌの上空と地下に広がる巨大な空間をとらえ、地球から太陽系へと話は大きくなり、最後は諸惑星が太陽の炎に呑みこまれるヴィジョンにまでエスカレートする。

[...] toutes les parties du grand tout s'efforcent à s'approcher, et [...] il est un instant où il n'y aura qu'une masse générale et commune.⁶⁾

→こうした宇宙の巨大な一体像は、地上の微細な出来事の意味を一挙に無化してくれる治癒効果を発揮し、〈自然〉との紐帯を回復させる。

c：究極のモラルを目指す哲学者のアイデンティティー探究——〈記憶〉の魔術と〈自然〉の物質的想像力によっておのれを取り戻した（それはちょうど彼自身が詳細に分析している温泉の効果とよく似ている）ディドロは、未知の土地ブルボンヌで見聞する人間模様のいちいちを、〈哲学者〉のモラルという物差で分析・分類しようとする。

テーマ1：〈他者への判断〉——温泉成分の分析を政府から依頼されながら、支給がとだえると研究を放棄して道楽に走った科学者ヴェネルは、〈同胞愛〉と〈後世〉を知らない不幸な人間である。噂に聞く

エルヴェシウスの近隣貧農に対する態度も哲学者として思いやりに欠けている。一方、ブルボンヌの住民にさりげなく麦をほどこしたルイエ地方長官夫人は善行の鑑のような女性である。

テーマ2：〈他者への関わり〉——ルイエ夫人の美德に涙する自分。

湯治客の一人ブド師のやつれ果てた姿にやはり涙する自分。夫を亡くしたプロピアック夫人を慰めるという善行。さらに、徴税官故プロピアック氏の後釜に友人ドヴェーヌを推薦しようとした友情⁷⁾。

→温泉地ブルボンヌでの滞在を描くにあたり、結局ディドロは住民や湯治客との交流にきわめて倫理臭の強い枠組みを当てがうことで、自己の徳性強化につとめている。

以上見てきたように、『ブルボンヌ紀行』の一見乱雑な構成にはそれなりの文法が働いており、自己を固定する〈記憶〉と自己および世界を流動させる〈自然〉という、対立する二つのテーマを抱え、統合する主体として〈哲学者〉の像が確立される。『紀行』が隠蔽する不幸な性愛の傷は、〈家族〉への逃避で癒されると同時に、宇宙の全物質の流動と変転という〈自然〉ヴィジョンのなかに解消されてしまう。このヴィジョンを通して見る限り、女の心変わりなるものも刻々姿を変えるこの森羅万象のほんの小さなエピソードにすぎない⁸⁾。

1770年夏のラングル・ブルボンヌ旅行をはさんで、ディドロの生活と著作のあいだにそれまでついで見られない〈家族〉と〈自然〉をめぐるひそかな対話が交わされているのはまことに興味深い。ディドロの自然哲学の到達点ともいえる『ダランベールの夢』三部作完成はモー夫人との接近とほぼ同時期の1769年である。『夢』の壮大なコスモロジーは、翌70年の『ブルボンヌ紀行』で〈家族〉のテーマ系と交叉し、性愛をめぐる新しい認識をえて72年に『女性について』、さらに同年秋からの『これはコントではない』、『ド・ラ・カルリエール夫人』、そして『ブーガンヴィル航海記補遺』の三部作へと発展する。この作品系列はディドロの生涯でおそらくはじめて姿を現わした男女の性愛に関する考察をテーマにしている。一方、久し

ぶりの里帰りと娘の結婚話に触発された〈家族〉のテーマ系は、コメディ・フランセーズにおける『一家の父』再演（1769年8月）あたりに端を発し、『ブルボンヌ紀行』を経由して71年春に発表された『父親と子供たちの対話』で全面開花し、さらに72年（これはアンジェリックの結婚の年でもある）から始まる〈性愛〉ものへと流れこんでいく。『ブルボンヌ紀行』はこうした二系列を温泉地という特殊な空間で交流させ、哲学者の道德枠にとりこもうとしたディドロの試みの一端なのである。

Ⅲ：メネトラの場合

ディドロの紀行文に、どこまでも対照的な作品を対置してみよう。ジャック＝ルイ・メネトラの自伝『わが生涯の記録』は、その前半部分がパリのガラス職人である作者の七年間におよぶフランス遍歴の模様を記した旅日記にあてられている。ディドロとメネトラの数少ない共通点の一つは、父親がともに職人であることである。ディドロの父はラングルの人望あつゝい刃物職人の親方だった。その父親をはじめとする〈家族〉との離別という犠牲の上に築いたおのれの精神の〈放蕩〉、すなわち哲学と、それに見あう生活上の〈放蕩〉、すなわちモー夫人との関係⁹⁾、そうしたものをしみじみと眺め返し、超越的な自然のたたずまいに思いを馳せるという場所に、『ブルボンヌ紀行』を綴るディドロは立っている。

親方見習い (compagnon) としてフランス各地を旅する若い自分の姿を、パリに定住したメネトラはどのような場所から描いているのだろうか。

パリの父親のもとで四年間の徒弟修業を終えたメネトラは、親方 (maitre) になるために必要な見習い期間を国内遍歴で過ごす。旅先では自分が属する仲間組合 *compagnonage* の扶助を受け、注文に応じて仕事をし、職業団内部の慣習や規律に従って暮らすのである。メネトラの『記録』はその旅の模様を語るなかで、ディドロの『紀行』を律しているのと同じ文法、すなわち三つの主題をなぞっているように思われる。

a：記憶によるアイデンティティー探究

テーマ1：〈父〉——亡き父への追憶に涙するディドロと反対に、メネトラはバリでガラス職人の親方として働く父ジャックの歩んだ道を辿っている。幼年期から父との確執が絶えなかった彼にとって、旅は父を目指す成長の道程であると同時に、父の支配から解放されて自由を謳歌できる特権的体験であった¹⁰⁾。いい換えるなら、フランス遍歴は職業人としてのメネトラを、消し去ることのできない記憶の絆で父と結びつけているが、同時に放浪の息子たる彼は強い父親の記憶を束の間抹消して気儘に生きるのである。

テーマ2：〈神話的過去〉——古代ローマやガリアとの紐帯を確認するディドロと同様、ガラス職人メネトラは仲間組合との一体感のなかで、組合がテンプル騎士団長ジャックを祖とする職人秘密結社の伝統につながっていることを確認する¹¹⁾。

→〈父〉および〈神話的過去〉を媒介にしてえられるアイデンティティは、ガラス職人のそれである。だが、メネトラは職業レベルの自己確認に飽き足らず、新しいテーマ系をもとめる。

b：自然エネルギーの発散——aのテーマ系がメネトラを職業の世界につなぎとめる役割を果たしているのに対し、性愛の営みは彼をあらゆる束縛から解放する。メネトラは、若い自分が七年間の旅で経験した色事を、無限反復する欲望の覚醒と充足というリズムの下に描き出した。仲間組合の掟も性愛の領域には及ばない。こと女性に関してメネトラは〈自然〉そのものである。というよりも、〈自然〉そのものであるように描かれている。モー夫人との性愛を隠蔽しなければならないディドロと違い、メネトラの筆は何も隠さない。ニームでねんごろになったプロテスタントの女性との約束と裏切りのエピソード¹²⁾が、なによりも雄弁に、〈変化〉し〈流動〉する〈自然〉であるメネトラの姿を伝えている。ただし、メネトラの〈自然〉さが、回想録の執筆時点で幾多の不純物を払い落としたある種の洗練を獲得していることは注目されてよい。若い遍歴職人の性生活に登場する相手はつねに女性で

あるとは限らない。同性愛や獣姦が日常茶飯事であったはずの生活実態について、しかしながらメネトラはなに一つ語ろうとしないのである。

→〈自然〉はつねにある事象や価値を超越する規範として語られる。ディドロはモー夫人との挫折体験を自然エネルギー説に〈転移〉したが、メネトラは清濁あわせのむがごとき性体験を女性との色事という洗練された様式の枠に〈純化〉して報告したのである。

C：究極のモラルを目指す職人のアイデンティティー探究——ディドロの紀行文にあって、〈家族〉と〈自然〉の対立を止揚する〈哲学〉が究極の参照枠になっているように、メネトラの旅日記でも、〈父〉や〈結社〉といった共同性の強い絆と〈性愛〉とを統合する〈道徳〉がいたるところで語られている。哲学者ディドロの指針となりえたのは古代の先人ソクラテスやセネカといった偉人たちとの連続の意識（それはラテン碑文の解読行為にもつながっている）であった。職人メネトラが規範とすべき道徳もまた、偉大な伝統を誇る仲間組合との一体性においてほかにない。メネトラが各地で宿泊する職人旅籠の規律と連帯、友愛や供応の慣習、儀式化された祭や乱闘、これらはすべて時間をかけて緻密に練り上げられた厳格な道徳律にもとづくものなのである¹³⁾。時と場合によっては、女性に対する職人の暴行行為ですら、旅籠のなかでは儀式的様相をおびてくる¹⁴⁾。その意味で、メネトラが読みとったカリヨン城の碑文は、結社に属する者の矜持と傲岸の意識を若いガラス職人に目覚めさせる働きがあったと思われる。

→ディドロが『ブルボンヌ紀行』で回復しようとしたアイデンティティーは、〈哲学者〉という観念上の共同体との一体感のなかで保証される。メネトラが究極の道徳枠としている〈仲間組合〉の連帯は、十六世紀以来の教会と国家の禁止にもかかわらず根強く生きのびつづけ、やがて産業革命の波に呑みこまれる、これまたはかない共同体意識なのである。

IV：まとめ

二つの紀行文にはそれぞれ〈秘密〉の部分がある。ディドロは『ブルボンヌ紀行』をおそらくは旅の直後に執筆したが、テキストはいかにも混乱の様相を呈し、〈家族〉〈自然〉のテーマ系を〈哲学〉は最終的に総括しえないまま、またしても開かれた状態で作品全体が終ってしまう。その謎めいた表情、いい換えればこちらの期待をはぐらかすしぐさが、ディドロの作品にいわくあり気な雰囲気を作りだしている。それは、あらゆる旅人を解読へと誘う古城の碑銘が発散する、あのいわくあり気な雰囲気そのものなのである。そして、読み手を誘いかけるテキストの構成上の混乱（脱線や連想や介入など）は、秘密を守ると同時に、秘密の所在をある選ばれた人にだけ伝えようとしている、これまた秘密の符牒なのだ。ブルボンヌの碑文が旅人に高度の知識を要求するように、『ブルボンヌ紀行』も書き手と読み手との間に秘密結社の掟のようなある種の黙契と、さながら身内同士のような押れあいを要求している作品なのである。読み手が秘密の符牒（重層構造、テーマ系、そして隠蔽されているモチーフなど）を解いた時、はじめて〈哲学〉が秘密の奥に隠れた第二の秘密として姿を現わす。その時、読み手はフィロゾフと同一化している。

メネトラの『記録』を読む者に、そのような哲学者の結社への参入といった印象はまったくあたえられない。稚拙なフランス語が時として意味不明である以外、『記録』にはなんらこちらの解釈を誘うような秘密めかした仕掛けが見当たらないのである。紀行文全篇を通じて、メネトラはほどよく父に反抗的で、十分に好色であり、また規範的な職人である。すなわち〈父〉や〈性〉はなんら矛盾することなく〈職業道徳〉のテーマに包摂されており、どのテーマにも隠蔽すべき傷や秘密などありそうにない。それにもかかわらず、私が『わが生涯の記録』にある種いわくいいがたい〈謎〉の印象を抱くのは、もともと長大な文章を綴る習慣のない職人階層の人間が、なぜこのような自伝執筆を思い立ったのか、どうしても理解することができないからである。メネトラの〈秘密〉とは、いってみればその著作の秘

密のなさである。秘密をもたない人間はふつう文章を書かないものだ、というのが私たちの常識である。『わが生涯の記録』はそのような常識をこえた地点に成立している数少ない作品であるといえる。

NOTES

- 1) Diderot, *Voyage à Bourbonne, à Langres et autres récits*, Ouvrage collectif présenté par Anne-Marie Chouillet, Aux Amateurs de livres, 1989, p. 36. 以下本書は VB と略記する。
- 2) André Garnier, 《Diderot et l'épigraphe》, in VB, p. 132.
- 3) Jacques-Louis Ménétra, *Journal de ma vie—Jacques-Louis Ménétra Compagnon vitrier au 18^e siècle*, présenté par Daniel Roche, Montalba, 1982, p. 96. 以下本書は JMV と略記する。
- 4) 『新エロイーズ』は、メネトラが読んだと思われる六点の書物に入っている (JMV, p. 300)。
- 5) Arthur M. Wilson, *Diderot—Sa Vie et son œuvre*, traduit de l'anglais par Gilles Chahine, Annette Lorenceau, Anne Villelaur, Laffont/Ramsay, 1985, pp. 478-479.
- 6) VB, p. 35.
- 7) ただしこの友情行為は、プロビアク未亡人が別人間を夫の後釜に考えているとわかるに及んで、危うくディドロの評判に傷をつけかねなかった。
- 8) 人間の存在を相対比する巨大な視点から〈寛容〉を説くのは、ディドロの常套手段である。cf. 《si, par hasard, nous n'occupions que le milieu entre les êtres les plus parfaits et les êtres les plus imparfaits, en regardant avec mépris ceux que la nature a placés au bas de la grande échelle, n'accorderions-nous pas le même droit à ceux qu'elle a placés au premier échelon et qui sont autant au-dessus de nous que les objets de notre dédain sont au-dessous? Dans une machine où tout est lié, comme il n'y a rien d'inutile, pas même le gros ventre, le gros appétit et les fréquents besoins de mad^e Gillet; s'il y a quelque chose d'indifférent et d'abject, c'est une suite de notre ignorance》 (*Correspondance*, t. 3, éd. Georges Roth, Les Editions de Minuit, 1957, p. 119)。
- 9) 哲学の〈放蕩〉と生活の〈放蕩〉を鮮やかに重ねあわせて描き出したのが、いうまでもなく『ラモーの甥』の冒頭である。
- 10) その体験の最たるものは、メネトラが1763年春に一度バリーに帰った折り、それとは知らずに父の女と寝てしまうエピソードであろう。〈父〉と〈エネルギー〉という両テーマ系のみごとな融合がここには見られる (JMV, pp.

111-112)。

11) *Ibid.*, pp. 50-51.

12) *Ibid.*, p. 88 *sqq.*

13) Daniel Roche の論文を参照のこと (*ibid.*, pp. 333-354).

14) たとえばモンペリエの旅籠での出来事。刃物職人が連れてきた娘の男装をメネトラは目ざとく見破って、刃物職人の留守中に闇を利用してまんまと娘をものにする。